書下ろし新潮劇場

新潮社

書下ろし新潮劇場

吉田知子

鴻

昭和48年9月15日印刷／昭和48年9月20日発行
発行者■佐藤亮一／発行所■株式会社新潮社
〒162 東京都新宿区矢来町71／振替東京808
印刷■大日本印刷株式会社／製本■共同製本
©1973, Tomoko Yoshida, Printed in Japan
落丁本はお取替えいたします
定価550円

鴻（おおとり）

——一幕四場

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

又頻造諸悪　不脩一善
凡諸酷刑　無不親覧
国内居人　咸皆震怖

また頻に諸の悪を造し、
一つの善をだに脩めたまはず。
およそ諸の酷刑
みづから覧たまはずといふこと無く、
国内の居人、
咸皆に震ひ怖りき。

（武烈紀）

時　六世紀初頭　冬

所　泊瀬列城宮内

人　王（小泊瀬稚鷦鷯王）

大伴金村

物部麁鹿火

許勢男人

荒籠

若水郎

影媛

春日媛

白氷

朝香

婢

第一場

正面中央に王ひとり坐っている。衣服からのぞいている首、手などはすべて白絹で蔽われている。いまのところ顔だけが全身の膿(う)みくずれから救われている。しかし、それもながくはあるまい。狂熱的な激情の合間にくる弛緩した痴呆状態。気品のある秀でた鼻梁(びりょう)、鋭いまなざし、白い額。そして鮮やかな紅色にきっぱりと結ばれた唇。それらはまだ彼に残る若さと強い気質を示している。王は茫然と宙をみつめたまま置物のように坐っている。

婢(つかいめ)登場。栗を盛った高杯(たかつき)を捧げて王の前におく。

婢　栗をお持ちしました。十月に丹波(たんば)より貢物(みつぎもの)してまいりましたのが、まだこんなに残っていたのでございます。

王　（鈍く頭を動かして栗と婢を見る）お前はなんだ。

婢　先日お目通りさせていただきました婢でございます。このたび葛城よりまいりました官婢でございます。

王　小泊瀬舎人はいずれへ参った。

婢　……王がお斬りになりました。

王　（呼ぶ）猪の子。猪の子はどうした。猪の子、ここへ出てまいれ。

間。

婢　昨日でございます。その（正面を指さし）野を走ってみよと仰せられ、走っているところを矢で射てお殺しになりました。

間。

王　それは惜しいことをした。あれは面白い男であったのに……。うむ。他に殺しようがあったのだ。木に登らせて射た方が興が深かったかも知れぬ。あれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はおそろしく肥えふとった男であったから落ちるときの地響きが凄まじかったであろうに。

婢　まことに、仰せの通りでございます。

王　お前のように老い、ひからびた婆では何の役にもたたぬわ。初めから死んでいるようなものだ。

婢　有難きしあわせにございます。

王　もうよい。……（思い直して行きかけた婢を呼びとめる。婢のしたたかな無表情に気づく）待て。お前、ただの民部の女ではあるまい。どこから来た。言え。

婢　はい。葛城香鳥臣の家の者でございます。

王　家の者？……臣の家の者を婢にか。

婢　臣にそむきましたるゆえ。

王　（興味を抱く）ほう……

婢　夫のみまかりました後、田を臣に渡しませんでした。あれはわたくしのものでございますから。無理に奪われてからは、人を使って田にできるものを盗

ませたのでございます。

王　そこで、この列城宮へ追いやられたのか。香鳥は気のきく男とみえるな。

婢　はい。さようでございます。こちらへ送られるのが最も重いお仕置きなのでございます。わたくしも、もうこの年でございますから、臣と争うのも大儀になりました。……もはや、どちらでもよろしいのでございます。

王　どちらでもよい？……何のことだ。何だ。言ってみろ。

婢　いつ命を召されようと……（急に語調を変える）わたくし、申しあげたいことがございます。わたくしはかまいませんが、わたくしがいなくなりますと、あと、お側につかえる者はいなくなります。この栗を捧げてまいりますのも、本当は卑しい婢などの役目ではございません。白氷さまも、朝香さまも、お部屋にこもったきり。皆、おそれ、逃げているのでございます。いまのようなことをお続けなさいますと、この年のうちに国中が死人で満ち溢れることになりましょう。

王　（機嫌よく）そうなると、どうだと言うのだ？……わしが死人は大好きだと言

ったら?……そうだ。死んだ者のただひとつの欠点は、もうその上殺すことができないということだ。では、生きている者のたった一つのよいことは何だ?……さあ、申せ、葛城の媼。

婢 死ぬことでございましょう。

王 少しちがったぞ。殺せることだ。(突然) さがれ、おいぼれ。

再び王ひとりになる。真剣に考えこむ。ひとりごとを言い始める。

王 油で煮ては油が惜しい。火であぶっても炎もでまい。丸裸にしても、あのような枯木では大した見ものでもなし……あの大きな樟につるして矢で射てはどうであろう。ずっと遠くから射れば、なかなかあたるまい。いまあたるか、いまあたるかと怖れるであろう。(笑いだす) どちらでもよいなどと言って、やはり命が惜しいのだ。殺せばつかえる人がなくなるなどと、もっともらしいことを……

婢が影媛を伴って入ってくる。影媛は端麗な容貌だが痩せているために酷薄な感じが

する。張りつめた糸のような危険な美しさ。婢は影媛を残して去る。影媛はおそれげもなく足早に王に近より挑発的なそぶりをする。

影媛　（わざと、はすっぱに）おやおや、今日はまだ血のにおいが致しませぬ。いったいどういうわけやら。

王　そうそうお前の気にいるようにはできぬわ。

影媛　お美しい方たちはどうなさいました。ほら、白氷と朝香でございましたか。

王　殺されぬうちに逃げる相談でもしているのだろう。

影媛　では、まだご無事で。珍しいこと。

王　別に珍しくもない。影媛と同じことだ。

影媛　わたくしと？（不機嫌になる）わたくしは白氷のように、たおやかではありませぬ。

王　いやいや。

影媛　朝香のようにおさなくはございません。

王　朝香はほんの子供だ。男人（おひと）もどこからあんな子供をみつけだしたものやら。

影媛　女だとうかがいましたが。許勢大臣の。

王　そうではあるまい。……あれでは守りがいる。泣いてばかりいるわ。

影媛　お似合いでございます、お守り役が。

王　そうだな。泣く子は殺せば黙る。こんなに楽なことはないわ。……白氷のほうは麁鹿火の末娘だそうだ。そうすると、お前の妹ということになるな。

影媛　わたくしの？……いいえ。

王　それでは、それもいつわりか。

影媛　さあ、それは存じません。わたくしは麁鹿火などというお人と何のつながりもございませんから。ただ、白氷は妹ではないと申しただけでございます。

王　お前は物部麁鹿火の女だ。お前は麁鹿火の家に住み、麁鹿火のものを食っている。

影媛　いいえ。

王　（影媛の衣服をさす）では、これは何だ。この珍しい織り方の価高い衣は。道で拾ったとでも申すのか。

影媛　女に絹はつきもの。価高い女には価高い絹が自然に授かるものでございます。

王　ふん……女は皆そうだ。言葉につまれば平気で虚言でも何でもいう。

影媛　はい、たしかに。……わたくしは女でございます。女らしく、くだらぬことを喋ります。王は王らしく、男らしく政をあそばせ。

王　うむ。それもよいな。ひまつぶしに、わしも政でもしようかと思っているのだが、金村がなかなか死んでくれないので困っているのだ。お前からも早く死ねと申せ。

影媛　（けたたましく笑う）では、では王は金村が死ぬのをお待ちになっている？……国中が震い怖れている王が？……全く、大伴金村は大したものでございます。平群真鳥を滅ぼしたのも金村。鮪を殺したのも金村。八年前は、金村は王と同じ年ですからわずか十九でございましたのに。（うたうように）継嗣の皇子は、なんにもなさいませんでした。想う影媛を卑しい臣の子に先取りされても、ご自分では、なんにも。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com